ARSENE PORUGO SPECIAL
アルセーヌ・ポルゴ特別篇

夏木康志

目次

アルセーヌ・ポルゴ特別篇
パンサー VS 西郷 3
銀河帝国の一番熱い日 8
エピソード ZERO 14
決着 18
邪道との決別 22
邂逅！ 東郷とザ・グレート・ブシドー 26
クレイジー・ヴォイス 30
東郷 VS 西郷-ファースト・コンタクト- 37
最後の決勝戦！ 41
さらば、グレートセキカワ！ 44

アルセーヌ・ポルゴ特別篇

パンサー VS 西郷

この世界に最強の格闘技があるとしたら、それはプロレスだ。そう思い込まされて生まれた文化が U だった。U スタイルのプロレスラーが最強。キック、サブミッション、スープレックス。これが、ジパング人のいだいていた U という幻想だ。

一方、ジパング発祥の柔術は柔道に進化して、世界中に普及していた。オリンピックの種目にもなっている。しかし、何でもありのスタイル、まあこれも究極という意味では U だが、でまず最初に頭角を現したのはブラジリアン柔術だった。これはもともと日本の柔道をベースに、ブラジルで発達した技術体系だ。

アメリカ文化なのかヨーロッパ文化なのかわからないけど、確実に西欧起源で、古くはギリシアで行われたいたパンクラチオンから進化したプロレスと、ジパング起源でブラジル育ちの柔術。ジパング人だったら、柔術家を応援しそうだが、現実は違った。

ジパング人が応援したのは U スタイルのプロレスラーだった。なぜなら、U はプロレスでジパングのプロスポーツとして根付き、総合格闘技 (MMA) ブームが来る前から、格闘技色の高いプロレスとしてジパング人に好意的に受け入れられていた。

当時、ブラジリアン柔術がジパングに登場した時、黒船来襲と記事になったこともある。そのくらい、まあ飛行機で二日くらいか、ジパングとブラジルとの文化的距離は開いていた。

そしてジパング人達はジパング起源のブラジル育ちの柔術家より、ジパング出身のプロレスラーを応援していた。

前置きはこのくらいにして、今日のテーマである、パンサー VS 西郷について語ろう。パンサーは覆面レスラーで、ファイトスタイルは U（ ユニバーサル・レスリング ）だ。

一方、西郷は柔の道を極めた漢で、ファイトスタイルは柔術ベースだ。パンサー対西郷の、おそらく空前絶後の試合が行われたのは今日の夜だった。場所はムーンアリーナ。明日になる前に、この興奮を書いておこう。

まず四角いリングに、U のテーマと共にパンサーが入場する。西郷のテーマは名曲津軽三味線冬景色だ。赤コーナーに西郷、青コーナーにパンサーが陣取る。ルールは何でもあり、ただし目つぶしと金的はなしだ。１５分２ラウンド、判定はなし。西郷は柔術衣、袴に、オープンフィンガー。パンサーは上半身裸で、下はパンタロン。オープンフィンガーとレガースは紫色だった。

セコンドはパンサーの側はトシアキ・フジワラ、ジョー・ヨージ１２世、西郷の側はマリア・ハロルドとライアン・ヤマモトだった。

ゴングが鳴る。

パンサーはアップライトに構えている。西郷は自然体だ。

パンサーのジャブがうなる。西郷はステップバックでかわすと下段に足払い気味のローキックを放つ。

パンサーは今のローをかわすと、燕返し気味のシャッセ（ 横蹴り ）を放った。西郷は今のキックを右の拳で叩き落とすと、そのままタックルに入る。パンサーがダウンする。ガードポジションをとるパンサー。西郷は上から肩固めを狙っていた。パンサーはがっちりと両足を交差し、パスガードを許さない。ガードポジションのパンサーに西郷は上からパウンドを落とす。パンサーはパウンドの瞬間、ブリッジして西郷をはねのけると、そのままハンドスプリングの要領で、立ち上がった。

スタンドならばパンサー、グラウンドならば西郷。

しかし、西郷詩郎には、究極の大技、一本背負い崩れの山嵐がある。そして、パンサーにもタイガードラゴンスープレックスホールドがあった。もちろんルール上、投げの一本はない。投げて KO するか、そのまま決めるしかない。もちろん、スリーカウントもない。

　パンサーはいきなりの左ソバットから右のコークスクリューミドルキックを放った。会場がわく。西郷は右ミドルをキャッチすると、一気に踏み込んで、パンサーを右の一本背負いの体勢で担ぎ上げた。そのまま右足で電光石火、払い腰のようにパンサーの右足を苅り払う。一本背負い崩れの山嵐が決まった。通常の山嵐が相手の右襟をつかんで技を掛けるが、一本背負い崩れの山嵐は相手の右腕を抱えて投げる総合用にアレンジされた技だった。

　パンサーはダウンする。西郷は袈裟固めの体勢から、右の肩固めを狙っていた。

パンサー、踏ん張れ。そこはブリッジだ。体を捻ってかわせ！

　フジワラの激が飛ぶ。

　パンサーはまたも不屈の闘志と全身のバネで西郷をはねのけ、立ち上がった。

俺の山嵐を食らって、今まで立ち上がってきた人間がいただろうか？

　西郷はそう自問自答していた。もちろん、もしいるとすれば、それは東郷源一郎であり、初代パンサーだけだろう。そして、目の前にいるのが、二代目パンサーことアルセーヌ・ポルゴだった。

　パンサーはスタンド勝負でキャッチ覚悟で右のミドルを連発した。西郷は今の蹴りをガードでしのぐ。

　かつて東郷源一郎との完全決着を行うために開発した、あの技を使うときが来た。

　西郷はワンツーを放った。呼応してパンサーが左ジャブを踏み込んではなった瞬間、その技は決まった。

　西郷はパンサーの左腕をキャッチすると、そのまま右腕で抱え込んだ。逆一本背負いの体勢でそのまま西郷は躊躇なく、相手の右足を払って巻込んだ。パンサーは左腕を逆に決められたまま一回転して、頭からマットに突っ込んだ。西郷は空中で回転してそのままパンサーを巻き投げた。

山嵐改だ！

パンサーは左腕を抱えてダウンしたまま、もがいていた。

パンサー、ブリッジだ！ バックは絶対に取られるな！

パンサー、踏ん張ってくださーい！

セコンドの激が飛ぶ。

パンサーは背筋力と首の筋力を活かして、今の大技から、またも立ち上がった。

しかし、左腕を痛めてしまった。

もう、ジャブも使えない。タイガードラゴンスープレックスのクラッチも出来ない。チキンウィングも狙えない。

パンサー、パンサー、パンサー

会場のファン達がパンサーにコールを行った。

西郷、西郷、西郷

もちろん、会場の西郷ファンも大声援を送る。

パンサーは全身の気を集中すると、最後の大技で勝負に出た。

スタンドから西郷がタックルに来た瞬間、パンサーは右の飛び膝蹴りを放った。

西郷の頭をパンサーの膝が貫いた。

勝負は決まった。

テンカウントを聞くまでもなく、今の攻撃を見たセコンドのマリア・ハロルドは白いタオルをリングに投げ放っていた。ライアンは無言で今のマリアの行動を止めたが、勝負の結果は着いていた。

パンサーは右腕を差し出したが、西郷はその腕を振り払い、立ち上がると、無言で一

礼をしてリングを去った。

　ゴングの余韻がさめるとパンサーのテーマが会場にかかった。

　パンサーは無言でリングを降りると、足早に会場を後にした。

　パープルパンサーの公式試合記録、つまり連勝記録も全て今日で終わっている。その後、パープルパンサーを名乗るレスラーは二度と登場しなかった。

銀河帝国の一番熱い日

　ついに３代目の銀河の大王も次の後継者を指名する日が来た。もちろん息子のギャラクティカジュニアを４代目の大王にして、龍族が銀河帝国議会議長として権限を握る。その手筈だ。

しかし、銀河の大王の座を狙う人物は他にだた一人。ネコ族の若きリーダー、ソレイユ・シャノワールだ。さらに銀河の女王の座を狙う人物も一人いた。元ミス・ワカマツことユメミ・ポルゴ夫人だ。

銀河帝国議会で、次の議長を選ぶ選挙が行われる決定が告知された。候補者は息子一人でいいかな？ と大王が呼びかけた瞬間、シャノワールが異議有りと呼びかけ、選挙に立候補することを告げた。さらに、ネットヴィジョンで銀河帝国議会生中継を見ていたポルゴ夫人も、何とか今回の選挙に立候補できないか模索しだした。

「王子もシャノワール氏も男よね。それより、女性の私が女王になるって言うのはどうかしら？」

「ジュニアの子育てはどうするんだよ？」

「保育園！ いや子供園」

「なんとか大王の息子かシャノワールが次の大王になるのを妨害して、ワタシを女王にする道はないかしら？」

「唐突な話だな。もちろん、大王の後継者指名の話が一番唐突だが。前もって後継者を指名して、院政を行って後継者を育てる。慎重な大王の考えそうなことだ。」

次の銀河帝国議会議長選挙は、キングオヴギャラクシーを兼ねて行うことが決定しました。銀河帝国議会特設リングで、ルールはタッグ形式で行います。現議長チームはシードといたします。以上。

すかさず公共広告が流れた。

キングオヴギャラクシーに優勝して、現議長チーム（ 大王＋王子 ）を破れば、あなたも銀河の大王になれます！

「フッフッフ、この龍族、ましてや現役の大王のワシのチームを破ることなどでできまい。これで帝国の国民達の注目を集めることも出来、一石二鳥じゃ」

シャノワールはタッグと聞いて、もとネコ族のある男を訪ねた。

「ネコマタの君ですが？ 我が輩、ソレイユ・シャノワールですニャ。」

「誰じゃ？ おお、オールドソレイユの息子か」

「実はお願いがあって、来ましたニャ」

「どうせ言わなくてもわかる。ワシを誰だと思うか？ ネコマタだぞ、伊達に尻尾が三本になるまで長生きしてはおらん。ギャラクシーの件、承知した」

「やりましたニャー。我が輩が大王になった時には、ぜひ副首相をお願いするニャ」

「ネコマタの君」は、「君」は敬称だが、長生きをしたことで神通力を手に入れている最強のもとネコ族の男だった。ちょっと肥満体だったが、3 本の尻尾で絶妙なバランス感覚を持っていた。もちろんファイトスタイルはネコ流カラテだ。ネコ流カラテは地球のカラテと違って、宇宙空間で、ネコ族によって編みだされていた。尻尾を使ってバランスを取り、絶妙な攻撃を打ち出す、もちろんいざとなったら、ツメもある。キバもある。

所変わって地球圏。

「あなた、やっぱりギャラクシーに出て、大王に勝つところがみたいな？」

「パートナーはどうする？」

「ライアン・ヤマモト君はどう？」

こうしてアルセーヌ・ポルゴ＆ライアン・ヤマモト組、銀河帝国親子チーム、シャノワール＆ネコマタ組のキングオヴギャラクシー決勝トーナメントが発表された。ちなみに銀河帝国親子チームは主催者権限でシードだ。

まずジパングのテーマが鳴り響く。青コーナーより、ポルゴ＆ライアン組が入場する。一方、赤コーナーでは「シャノワールの凱歌」と共にシャノワール＆ネコマタ組が入場する。

ポルゴは中肉中背銀髪碧眼のジパング人、ライアンはやせ形の変則ストライカータイプの彫りの深い、笑顔が爽やかなジパング人、シャノワールは黒いネコ族が直立、ネコマタの君は白い大柄なネコ族の男で、尻尾が 3 本有る。

ゴングがなる。ライアン・ヤマモトが握手で試合を始めようとすると、シャノワール氏はいきなりの握手拒否と完全決裂の右ボディストレートを放った。

不意打ちは効いたな。でも、俺に打撃で勝負するのか？

ライアンは相手の右ひざを狙って、シャッセバーを放った。膝関節蹴りだ。シャノワールは今の攻撃を足を引いてかわした。

同じ攻撃を再びライアンは放った。

見切ったニャ。

と思った瞬間、ライアンの超低空タックルが決まっていた。

すかさず重量級のストンピンングで介入し、寝技勝負をさせないネコマタ。

「タッグマッチで寝技勝負はあり得ない。これ、常識だろ。」

ネコマタは軽快にコーナーに戻っていた。

「やれ！」

ネコマタの指示が飛んだ。

シャノワールが持っているネコ族のオーラを爆発させ、全身の中で燃焼させていた。

シャノワールがワンツーフック、フックと放つと、面白いようにライアンにヒットする。

ライアンは操気術の心得がなかった。

ポルゴが乱入すると、その前にネコマタの君が現れた。

「オミャーの相手はオレ様だ！」

ポルゴは目の前の壁のような大男を倒そうとラリアットを放つ。しかし、ラリアットはかわされ、次の瞬間バックをとられていた。そのままひねりを加えて後方にポルゴは投げ放たれた。

オーロラドラゴンスープレックスだった。

ライアン・ヤマモトも今の気を使った打撃攻撃で、立ったままノックアウトしていた。

シャノワール＆ネコマタ組の完勝だ。

「しかし兄弟、フィニッシュ技はドラゴンスープレックスよりタイガースープレックスの方がネコ族の技っぽくないかニャ？ まあ、掛け易さでいったら、ドラゴンの方が上だけど。ドラゴンキラースープレックスとかあれば、いいのにニャ。」

休憩を挟んだ後、会場に銀河帝国の国歌が鳴り響く。そして、遂に本日のメインイベント銀河帝国大王親子チーム対、シャノワール＆ネコマタ組が開催される。

今日、この日まで、俺はいくつ待っただろうか？ この星から差別や貧困がなくならない

のはなぜだろうか？　どうしてどこかではまだ戦争が続いている。天災だって終わらない。全てを変えるみせる、俺が、いやネコ族が。

シャノワールは心で誓った。

ゴングがなる。王子が先鋒だ。一方の相手はシャノワール。

「フーン、このネコ族の男を倒せば、ボクが次の大王か」

王子は両手の気を一気に解放するとギャラクシーウェーブを放った。シャノワールがかわすと、その光線はネコマタを直撃した。

片手、右手でギャラクシウェーブを握りつぶすネコマタ。伊達じゃない。

シャノワールはワンツーから左右の回し蹴りを打ち込んでゆく。スピードが違う。

赤コーナーの大王の表情から余裕が消えた。

青コーナーのネコマタはそろそろ本気を出せと指示。

ソレイユ・シャノワールの気が爆発的に高まった。そのまま右のアッパーカットで、王子の動きを止めた。

大王がノータッチでリングインする。そのままフルパワーギャラクシーウェーブの体勢に入った。

リング上が真っ白に光り輝く。爆発は起こらない。

大王は今の見せ技で相手の焦点をぼかすと、空中の死角に飛び上がり、空中から本気のギャラクシーウェーブを直撃させようとしていた。

うーむ。

ネコ絶拳！

ネコマタは叫ぶと、両手で今のギャラクシウェーブのオーラを吸収した。

用意はいいか、兄弟！

ネコマタは大王を空中でキャットハングに捉えた。リングでは王子をソレイユがキャットハングに捉えている。そのままひねりを加えてフロントスープレックス気味に両者を投げはなった。

ドラゴンキラースープレックスという大技が決まった瞬間だ。

ついに少数民族のネコ族が勝利し、龍族から政権交替を実施することになった。これにより４代目の銀河の大王はソレイユ・シャノワールになった。４代目の銀河の大王は副首相の座をネコマタに依頼したが、こう断られたという。

「政治は、本来将来のある若いやつが担うべきだ。どこかの国では老人が政治を行って、破局している。副首相は若い王子でいい。」

こうして銀河帝国の元王子は副首相に就任、ネコ族－龍族という新しい政治体制で銀河帝国の統治は安定・継続していた。

エピソード ZERO

俺はいつもの場所をジュニアと訪ねて行った。

父ちゃん、ここに眠っている人は誰？

お前の伯父さんだよ。俺にとっては親友。

親友？ 伯父さんの話を聞かせてよ。

あぁ、話せる範囲でな。

伯父さん、つまりワカマツ（ 若松右京 ）は第三次地球侵略戦争の際、対火星パルチザンとして闘って死んだんだ。俺をかばって。

火星人達は軽重力病という火星特有の奇病が発生して、地球の重力を恋しがった。そうして生命の杖という強力な武器を使って、このジパングにも襲来したんだ。

俺たちは大切な人、大切な惑星を守るために闘った。

もともとワカマツは文学青年で闘うことが好きなやつじゃなかった。ただ、ワカマツは守るために闘っていた。唯一の肉親を、そして仲間を守るために。

伯父さんの愛読書って、いつもママの本棚に置いてある、あれのこと？

ああ、ボードレールの詩集。

忘れもしない１０年前のあの日、妻の誕生日でもあるが、ワカマツは火星人一個小隊に囲まれ絶対絶命のピンチになった俺をかばって、代わりに死んだ。

－ワカマツっー！

－ポルゴ、妹を、ユメミを頼む！

あの時の言葉が胸に響く。

結局、頼まれたのは俺の人生の方だったのかもしれない。

もともとサイバー探偵になる前まで、俺は貧困問題を扱う開発学の研究者を漠然と目指していた。だが使命感よりも俺は現実を選んでいた。

多くの人命が地球侵略戦争で失われていった。友人、両親、親族、全て戦争で奪われた。そんな俺やミス・ワカマツが生きるために選んだのは、生きるためには手段を選ばないサイバー探偵だ。

ワカマツは文学部で仏文学を専攻していた。無事大学を卒業して社会人になると思いきや、その社会そのものが戦争で崩壊してしまった。ジパング人の若者たち、いや地球人の若者たちは自発的にパルチザンを組織して、火星人達に向かって行った。

あの頃はまだマーズアタックもなかった。いや、火星人によく効くヤクのことだ。

第 3 次地球侵略戦争の際、火星人達の隕石ミサイル攻撃で、地球がよく揺れたのを覚えている。大きな地震かと思うと、宇宙から隕石が降ってきたのだ。そうして火星人の地球侵略部隊が宇宙船と共に降下して、生命の杖で地球市民を手にかけて行った。

火星人達の着ている繊維は防弾チョッキを兼ねていて、銃による攻撃は一切通用しなかった。しかたなく肉弾戦に持ち込んでも、相手は何でも燃やし貫く生命の杖を持っている。俺たちは金属バットのようなお手製のチープな「武器」を持って、火星人達に無謀な挑戦を挑んでいた。

地球のマッドサイエンティストがマーズアタックを開発したおかげで、第三次地球侵略戦争は終結したと言われていた。

火星人達は機動力は弱かった。ただ、集団の数と生命の杖が問題だった。奴らは２０人（いや匹か）単位で地球人の人口密集地域を強襲しては、生命の杖で焼き払っていった。抵抗するものは、生命の杖で貫かれるか、焼かれるかだった。

絶対に許せないな。あいつら、あのキノコどもは地球圏から全て追い出してやりたい。

そうワカマツは言っていた。俺も同感だ。

火星人は地球人から見れば、キノコだった。キノコに義手と義足が生えている。義手は生命の杖を握っていた。俺たちは宇宙人から見れば、さしずめツチブタだろう。

で、今もお宇宙（そら）に火星人はいるの？ 攻めてくるんじゃないの？

あぁ、火星にはまだ奴らがうじゃうじゃいる。火星は皇帝制が終焉を迎えて、しばらくは攻めてはこれないだろう。それに、火星のマッドサイエンティストは軽重力病に効く薬を開発したと言っている。

どこに行っても、どの時代でも、いくら科学が発達しても、戦争はなくならない。君の星は平和だって？ 社会の仕組みを知らないから、末端の君にはそうみえてるだけだ。

でも戦いたくない。そりゃ、誰だってそうさ。でも、君の肉親や恋人が目の前で殺されそうになったら。守るために戦う、か、それもいいだろう。非暴力主義は時として偽善である、とは初代地球連合政府総長の言葉だった。その後は、力の伴わない正義に意味はない、という言葉が続いた。

もちろん地球連合政府は、地球連合内での内戦を一切認めず、惑星内平和主義を貫いていた。惑星内平和主義の隙を突いて発生したのが、惑星間戦争だ。

人類が宇宙に出る前の２世紀は戦争の時代だったと言われる。そして人類が出てからの数世紀も惑星間戦争の時代だった。こうした連鎖は止めなければならない。勝利無き戦争の終結を生み出さないといけない。

この世界の歴史をいつか全て息子に話さないとと思いつつ、そこには、語り得ぬものには沈黙せねばならない、という事実が待っていた。

決着

ずっとこの日を待っていた。キングオヴギャラクシー特別試合。アルセーヌ・ポルゴ VS 西郷詩郎。パープル・パンサーではなくアルセーヌ・ポルゴとして、あの西郷と全ての決着をつける。

半年程、地獄の修行をした。コーチはトシアキ・フジワラ。スパーリングパートナーはライアン・ヤマモトだ。俺は古流柔術も柔道も、合気柔術も極めてはいなかった。今の俺に残されたスタイル、それは U スタイルだけだった。源流の古武術と現代 U スタイル総合格闘術の融合、そこにしか勝機はなかった。トシアキ・フジワラは関節技をまるで科学の講義のように，ポイント単位で極めた男だ。ライアンはブラジリアン柔術＋高専柔道、さらに打撃はサバットだ。結局、ファイトスタイルで最先端、パープル・パンサーの先を行くしか、勝機はないだろう。進化するプロレスが U スタイルの真髄と呼ばれたことがある。むしろ、同意したい。相手を一方的に決めて勝利していいいプロレス、それがシュートスタイル、いやユニバーサルレスリングだ。

西郷師範は銀河帝国に滞在すると、旧の大王と共に鬼神のようなトレーニングをした。あの重量級の大王を担いで山嵐の投げ込みを一日千回はやっていた。相手がジャケットをしていないくても、一本背負いの体勢から払い腰にいく、独特の総合用の山嵐だ。巻込まない、巻かなくても大ダメージを与えられる。しかし今回完全に投げた後に、迷わず逆十字に行くことを忘れなかった。打投極。一瞬摑めば、理合がまわる。西郷師範は打を捨てて、投極を取った。

丸坊主のフジワラが俺の肩を抱くように叩くと、テーマが鳴り始めた。地球の名曲 GLORIA（ 栄光 ）だ。

一方、青コーナーに俺が陣取ると、「津軽三味線冬景色」と共に赤コーナーに西郷が入場する。

特別レフリーはシャノワールだ。

ゴングが鳴る。

全身のオーラを第八段階まで高めると一気に発散した。この状態は１ラウンドまでしか維持できない。一気に最初から全力だ。

西郷は無言で足払いを仕掛ける。

ダミーだろ。まずは右のシャッセ（ 下段横蹴り ）からジャブで様子見だ。

異変はこの時起った。

西郷が打撃に付き合ってくれた。カウンターの右ストレートから左のローだ。

セオリー通り、ローをカットする俺。迷わず右のコークスクリューミドルキックを放った。

行けると思う。絶対に。

西郷は左腕でミドルをブロックすると空いた右腕でカウンター気味のストレートだ。

俺は踏み込んで左フックから右ストレートを放つ。

この瞬間を西郷は見逃さなかった。

右ストレートをキャッチして、右腕で抱え込むとそのまま低重心の体勢で電光石火の山嵐を放った。

衝撃。そして天地が一瞬で入れ替わる。そのまま右腕、肘のあたりに激痛が走る。

西郷の逆十字だ。俺は反射的にブリッジして切り返すと、何とか今の逆十字を外して、スタンドに持ち込んだ。

　アップライトに構える。右腕が言うことを聞かない。足は大丈夫だ。でも、タイガードラゴンスープレックスはもう使えない。最大の切り札を封印された。

　申し訳程度のジャブを放つと、俺は右のローを放った。絶対に折れない。腕は折れても、心だけは。勝負は捨てない！

　西郷は俺のローを燕返しで切り返すと、左ハイを放った。

　俺の頭上を西郷の左足が通過した。

　タックルに行く。

　西郷の左足がそのまま軌道を替えて、踵落としの体勢に入る。

　音速のタックルで間合いを詰める。西郷は近接の間合いに入ると、肘打で応戦する。

　一瞬、背後に引く俺。

　西郷が左の前蹴りを放つ。さらにステップインして、投げの間合いに詰め寄る西郷。

　西郷が掴み掛かった瞬間、俺は迷わず自護体で組むと、そのまま背後に倒れ込んだ。そのまま後転の要領で西郷を後方に投げ放つと、まるで巴のように西郷に乗りかかりマウントから一気に全体重を左肘に預けて、西郷の首をチョークに捉えた。一気に極める。

　ミスター東郷に伝授された古武術の技、柳倒れが決まった瞬間だ。

　西郷は両目を見開いたまま、気絶していた。

勝者、アルセーヌ・ポルゴ。

　確かに右腕は折られた。でも心は折れなかった。人生、そんなものだろう。心が大事。

　一瞬、リングサイドを眺めると、トトのチケットを握りしめている妻と、飴をしゃぶっている息子の姿があった。

家族。

アルセーヌ・ポルゴの個人の物語はいったんここで決着が着いた。これからは、家族の物語になるだろう。モノローグはいつか必ずおわる。そして、エピローグは唐突に。

邪道との決別

二代目パープルパンサーの正体。戦った俺にはわかる。アルセーヌ・ポルゴだ。同業者のサイバー探偵のはずのポルゴがなぜ、プロレスラーをやっているのか？ そこまではわからなかった。ただ言えることは、確実に俺はパンサー、いやポルゴに勝てるという根拠のない自信だ。

今まで、ポルゴにラフファイトでもギャラクシーでも通用しなかった。しかし、ポルゴには家族という弱点がある。その弱点を突かなくても、弱さを持っている人間と邪道の俺では生きている次元が違った。

弱いから、強い。本当はそうかもしれない。もう、パンサーを名乗ることをやめたポルゴに俺は今挑戦を申し込んだ。

拝啓 アルセーヌ・ポルゴ殿

貴殿との決闘を申し込む。場所は貴殿に任せる。

オータニ・コージより

ポルゴは俺の真意を理解したようだ。同業者として純粋に腕を競いたかった。

ポルゴはこう返事をした。場所はトキオの後楽園アリーナ。ルールは完全決着制のケンカマッチだ。日時は貴殿に任せる。

では一週間後の満月の夜に勝負だ。レフリーは西郷でいいか？

こうしてアルセーヌ・ポルゴ VS オータニ・コージの完全決着闇格闘技の試合が開催された。

入場曲もない。会場にはただ、試合を見届けるレフリー西郷とポルゴの妻子、それにセコンドにゴトーがいた。

ゴングが鳴る。

俺はいきなりゴトーから有刺鉄線ファイヤーバットを受け取ると、ポルゴに襲いかかった。ポルゴは一瞬のローリングソバットで、俺のバットをリング外に吹き飛ばした。

素手で行こう。クリーンにな。それとも、俺が怖いのか？

俺にとっては復讐が全てだった。相手がクリーンファイトを望むのだったら、それも望もう。そして、恐怖心などとうに捨ててている。

いきなりの右ストレートで俺はポルゴに殴り掛かる。ポルゴはカウンターの左ボディを放つ。そのままローを放つポルゴ。今のローをセオリーを無視してキャッチする俺。

左の延髄蹴りで俺に襲いかかるポルゴ。しかし、キャッチしたのは俺だ。全力でポルゴを抱え上げると、全身のバネでポルゴを真っ逆さまに投げるつける俺。サンダーファイヤーパワーボムが決まった。

しかし、ポルゴはエビで俺と距離を保つとハンドスプリングの要領で立ち上がった。

今の軽快な動きに戦慄を感じ始める俺。

ポルゴは右のミドルを連発すると、右エルボーから接近戦を仕込んできた。相手はスープレックスを狙っていることが読めた。

俺はポルゴの銀色の髪を掴むと、そのまま後ろに倒れ込んだ。デンジャラスドライバーオータニが決まった。なおも相手の髪と左腕を掴んで放さない俺。

ポルゴはいまの DDO を食らいながら、ポジションニングをコントロールして肩固めを使ってきた。

　意識が若干遠のく。

オータニ、ファイトじゃ。

ゴトーの激が飛ぶ。

　ポルゴは俺に覆い被さって、チキンウィングフェースロックを狙う。

　一瞬、俺は反射的に亀になってしまった。

　バックを取ったポルゴは必殺のタイガードラゴンスープレックスを決めると、そのままホールドした。

　西郷がスリーカウントを叩いた。

　完敗だ。

　絶対に勝てるという根拠のない自信は崩れ去った。でも、俺はクリーンファイトも出来るという新たな自信が、可能性が生まれた。

　邪道オータニは今日の闇試合で死んだのかもしれない。これからは王道を、俺も生きてゆきたい。そう思えただけでも、収穫は大きかった。

　試合が終わるとゴトーはリングサイドで涙ぐんでいた。ポルゴはクリーンに握手を求めて来た。俺は握手に両手で応じると、もうリングサイドで転がっている有刺鉄線バットとも別れを告げようと思った。

　なぜポルゴがサイバー探偵業だけではなく、プロレスラーをやっているのか知りたかったが、拳を交えた俺にはわかったことがある。王道は、そしてクリーンファイトは面白い。そしてまた生き続ける限り、キングオヴギャラクシーでポルゴとまみえることもあるだろう。

　もう手元に凶器や「武器」はなかった。でも、俺にも折れない心がある。それだけで、

十分だ。新たな可能性、クリーンファイトに俺は目覚めた。

邂逅！　東郷とザ・グレート・ブシドー

　黙々とスクワットをしていた。ここは金星フロンティア。そして、俺の名は東郷源一郎。
　目の前に、２メートル、２００キロ超級のスーパーヘビー級の仮面の男が現れた。

ミスター東郷だな？

如何にも。御主は？

ザ・グレート・ブシドーとでも名乗っておこうか。ミスター東郷の名は、銀河系にも広まっている。ワタシは、アナタと勝負しに来た。

面白い。私を源流の使い手と知ってのことだな。覚悟はいいな？

オーソドックスに構える俺。ブシドーは一瞬サウスポーに構えたが、俺の構えを見てオーソドックス（ 左前 ）に修正した。

相手は俺の動きに合わせてくる。相当の使い手だ。

まずはご挨拶代わりにワンツーだ。ブシドーはパリとサイドステップで今のワンツーをかわした。

俺はすかさず右膝狙いのシャッセバーを放った。

スイッチしてかわすブシドー。

ブシドーの目つきが変わった。

ワタシは何でも対戦相手の必殺技を受けてから、その技で相手を葬ることにしている！好きな技を掛けて来い！

ブシドーは言った。

俺は、とっておきはとっておこうと思った。ここは相手のミスを誘うべく、ダミーの技を仕掛けるべきだ。

わかった。わかった。行くぜ！

俺は踏み込み様にジャブを放った。さらにロングレンジ気味の右ストレートだ。

ブシドーが右ストレートを見切って、カウンターの右ストレートを放った瞬間を俺は見逃さなかった。

一瞬の隙をついて、右手首の関節を決めると一本背負いの体勢に入った。そのまま、相手の右足首を右足で刈り払いつつ、強引に前方に巻込んで投げた。

強烈な一本背負い崩れの山嵐巻込みが決まった。

そのまま相手の上半身に乗っかるように倒れ込み、頭を強打させた。

ブシドーは驚異的なスタミナで立ち上がってきた。

山嵐巻込みか？ 面白い技だ。今の技、確かにいただいた。

俺はブシドーの言葉を無視して、左ミドルから右のソバットへとつないだ。

ブシドーはボディでソバットを受けつつ、右のラリアットで反撃してきた。

俺が間合いを取る意味を兼ねて、再びワンツーを放った瞬間、ブシドーは俺の右スレートをキャッチして、そのまま一本背負いの体勢に入った。

この時を待っていた。俺はコシを入れて、今の一本背負いを受けきると、相手が右足を刈り払おうとする瞬間、全身のバネで後方に反り返り、ブシドーを投げ放った。

強烈なバックドロップが決まった。

通常の相手なら、ここではもう立ち上がっては来ない。

ぬう。

ブシドーは、言葉ともつかない声を上げると立ち上がってきた。

山嵐巻込みでもバックドロップでも通用しないスーパーヘビー級の相手だ。

源流の奥義、お見せしよう！

俺は裏構え、右足前の構えにスイッチすると、全身のオーラを具現化して強烈な左ミドルを放った。

すかさず、コンビネーションの右ハイでブシドーの頭を射抜いた。

ブシドーは脳震盪を起こしたようだったが、まだ立っていた。俺は止めに右のボディストレートを放った。

なおも全身のオーラを燃やして、牽制する俺。

ま、参りました。

ブシドーは、こう宣言した。

やはりアナタは私が銀河系で噂を聞き、この辺境の金星フロンティアまで尋ねてきただけのことはある使い手だ。失礼ながら、このブシドー、アナタに弟子入りしたい。

俺は、弟子は取らんことにしている。まぁ、例外があってもいいが。

先代の源師範亡き後、アナタがジパングの古流武術の正統後継者だと思える。

そこまで言われては、仕方ない。まぁ、この辺境の居酒屋で一杯盃を交わそう。

こうして、俺はザ・グレート・ブシドーと名乗る銀河帝国出身の異星人に源流、いや、東郷流を伝授することなった。

先代の源師範が亡くなり、師範に致命傷を負わせたのが西郷詩郎と聞いていた俺は、ブシドーを指導するという名目で、打倒西郷の秘策を練っていた。

ブシドーとのファーストコンタクトでわかったことは、やはり、あの山嵐を切り返すには、裏投げ系の技しかないようだ。もちろん、掬い投げや移り腰もある。しかし、一瞬の切り返しとなると、裏投げがベストのようだった。

俺はブシドーとの特訓で、後に龍虎スープレックスと呼ばれる、あの必殺技を編み出した。タイガーでもない、ドラゴンでもない、特殊なクラッチの至高の必殺技だ。そして、いつかみたあのマスクマンのように、タイガーでもない、ドラゴンでもない戦い方をしてみたいと思い描くようになった。

ブシドーがしていた仮面と同じ生地を使うと、オーラに反応して、マスクの色が変わることがわかった。いつかパンサー、いやパンサーを越えたパンサー、それは、パープルパンサーとでも言うべき存在だが、に俺は変身したいと思うようになっていた。

この手帳のメモが他人の目に触れるころには、俺はもう既にこの世の存在ではないかもしれない。しかし、ブシドーのように、新たな人間によって、俺の技への思いは受け継がれてゆくだろう。

そして、いつかは必ずあの西郷詩郎との決着をつけないといけないと誓う、宵の明星であった。

クレイジー・ヴォイス

あれは、まだ初代ジョー・ヨージが現役の時だ。クレイジーと名乗る柔道家が総合格闘技界に戦線布告をした。最強の格闘技は存在しない。最強の格闘家が存在するだけだと言って、真っ白な柔道着と黒帯で、各種総合格闘技の大会を優勝して行くクレイジー。そして、クレイジーに道場破りを仕掛けて、返り討ちにあった、初代ヨージ。

プロレス最強説が、揺らいだ。もともとプロレスは最強の格闘技で、中でももっとも進化したプロレス、いやプロレス以上のプロレスが、ユニバーサル・スタイルのはずだ。でも、あのＵスタイルですら、クレイジーに負けた。

もはや、プロレスラーとクレイジー一族は全面抗争に突入するしかなかった。

最初にクレイジーの番頭、ヴォイスと抗争に突入したのは、あの初代グレート・アジアだ。

初代アジアは３０分一本勝負で、クレイジーとの戦いに挑んだ。残り時間五分。マウントを取って、完全優位に立つアジア。ボコボコにパウンドで殴った。でも、クレイジーは、ギブアップしなかった。５分間、上から殴りに殴って、結局引き分けだ。

あのグレート・アジアですら、統一七冠王者ですら、引き分け。

プロレス最強説に戦慄が走る。

そしてＵスタイルのヒットマン、初代ジョー・ヨージの道場破りの失敗。レジェンド・パンサーもセミリタイアし、アキラ兄さんも組長も引退した今、残った最後の希望、それはグレート・セキカワだった。

グレート・セキカワ。デスマッチの神と呼ばれ、恐れられた伝説の男だ。

グレート・セキカワはヴォイス・クレイジーとのデスマッチを受け入れると、こう言った。

ルールはランバージャックでいいよな。俺様のセコンドはキラー・L 氏を指名する。

デスマッチのセコンドに本物の殺し屋、超一流の暗殺者を選ぶという絶妙なチョイスをするグレート・セキカワ。

ヴォイスはセコンドに兄のオリオンを選んだ。

クレイジートレインという曲にあわせて、入場するクレイジー兄弟。

一方、銀河交響組曲にあわせて、入場するグレート・セキカワとキラー・L。

グレート・セキカワは有刺鉄線ファイヤーバットを持参していた。そして、セコンドのキラー・L は愛用のワルサー Q バズーカ仕様を持参した。

リングインしたセキカワはセコンドのキラー・L に武器の有刺鉄線ファイヤーバットを渡すとこう言った。

アマチュア相手に、武器はいらねーな。素手で勝負してやる。ランカシャー仕込みのレスリングをなめるなよ。

ゴングが鳴った。

二百戦無敗を誇るクレイジーのタックルを潰すセキカワ。

伊達に、ケンカ慣れはしていない。

すかさずバックを取った。

クレイジーは仰向けになって、下からパンチで牽制する。

こちとら、プロだぜ。まずはスタンドからだ。

　セキカワはロープまで戻って、反動をつけるとラリアットだ。

　クレイジーはワキ固め狙いで、わざとラリアットを受けた。

　誰もが今のラリアットが切り返されると思った瞬間、そこにはダウンしたクレイジーの姿があった。

　音速のラリアットから、ネックブリーカーに切り替えるという超人いや超神的な業を使ったセキカワ。

　クレイジーはグラウンドに誘ったが、またもその誘いを断る、セキカワ。

グラウンドはマダムとしかやらない主義、と俺様の師匠が言っていたな。

　クレイジーが掴み掛かる。クレイジーが払腰狙いで勝負に出た瞬間、全身のバネを使って、垂直落下式ブレーンバスターに切り返すセキカワ。

誰がブレーンバスターは、例の約束事がないと決まらないと言った？ この俺様が、ガチでもブレーンバスターが決まることを証明したことになるな。

　もはやクレイジーに勝ち目はスタンドではなさそうだった。ランバージャックルールを利用しようと、わざとコーナーに誘い込む、クレイジー。

　パっとクレイジーの肩を叩くと、セキカワはこう言った。

クリーンブイレクだ。

勝負はリングで着けよう。

　クレイジーが音速の低空タックルに行く。

　またもタックルを潰すと、ドリルアホールパイルドライバーに捉えるセキカワ。

　そこから腕がらみに捉えるセキカワ。

ギブアップするなら、今だぜ。

　明らかに関節は悲鳴を上げていた。でも、立場上ギブアップは許されないのがクレイジー一族だ。

　KO で決着するしかないか？ 自ら技を解くセキカワ。

　右の掌底を放つ。左の掌底フックを放つ。今度はミドルキックだ。今のミドルをキャッチするとヴォイスは、大外刈りを狙いに行った。

かかったな。

　大外刈りで豪快にセキカワを投げたヴォイス。柔道なら、一本というところだ。

　しかし、最後に倒れていたのはヴォイスだ。今の大外刈りと同時に音速の DDT を放って、切り返したセキカワ。

　プロレスなら、ここでスリーカウントが入って決着だ。

　しかし、完全決着のデスマッチルール。しかもランバージャック。

　セキカワは非常ながら、ダウンしたヴォイスを無理矢理抱え上げるとコーナーまで走って、ランニングスリーの体勢からジャンピング・パワーボムを放った。

　パワーボムで投げられたクレイジーはなおも下から、最後の力を振り絞って、お得意の逆十字を狙った。

普通のレスラーなら、ここで一本取られることもあるんだよな。でも、俺様はデスマッチの神、グレート・セキカワだ。

　逆十字のポイントを外すと、ヒールホールドで切り返すセキカワ。

　完全に決まった。膝の靭帯までやられたはずだ。

どうせギブアップはしないんだろ。ランニングスリーも切り返すとはお見事だ。

　わざとセキカワはタックルに行った。掟破りのパイルドライバーでヴォイスが切り替えそうとした瞬間、セキカワは全身のバネで頭越しにヴォイスを後方に投げ放った。

　ポセイドンバスターが決まった。

　誰もがセキカワのノックアウト勝利を確信した瞬間、セコンドのオリオンが、有刺鉄線ファイヤーバットを奪って、リングに投入した。

ちっ、アマチュアが。

　最後の力を振り絞って、ファイヤーバットを振り回すヴォイス。

　バットがセキカワのボディを打ち抜いた。そのまま自軍コーナーまで追いつめられるセキカワ。クレイジー一族の逆転勝利がよぎる。

　何も手出しをしようとしない、セコンドのキラー・L。

　なおもバッドを振り回す、ヴォイス。

　セキカワは勝負に出た。

　有刺鉄線バットでセキカワの額を狙ったヴォイスを真剣白羽取りの要領で、有刺鉄線ごと摑むセキカワ。

虎穴に入らずんば、虎児を得ずか。

　燃えているバッドを摑み、奪い取るセキカワ。

　有刺鉄線ファイヤーバットを奪ったセキカワは，リング中央に燃えるバットを置くと、こう宣言した。

ここがテメーの墓場だ。くたばれ、ヴォイス・クレイジー！

　ヴォイスの前髪を掴むとそのまま DDT でバットに向かって、叩き付けた。

　ダウンカウントを要請する。

ダウン。ワン、ツー、スリー...ナイン。

　カウントナインの瞬間、乱入する兄のオリオン。

　すかさずリング中央の有刺鉄線ファイヤーバットでフルスイングして、オリオンを打ち抜いた。

　テン。ゴングが鳴る。

満塁ホームランってところかな。

　バッドを捨てて、リングを後にしようとしたセキカワを、背後からオリオンがなおも襲いかかる。

ファイヤー！

　セコンドのキラー・L から受け取ったガソリンを口に含んでいたセキカワは、フィニッシュに得意の火炎放射でオリオンを仕留めた。

百万光年速いんだよ。俺様に楯突くのは...わかったら、デテケー。

　こう言い終わると、グレート・セキカワはセコンドのキラー・L と会場を後にして、夜の街に消えて行った。

　夜の街でキラー・L はこう言った。

セキカワさん、実は俺、彼女が妊娠しちゃって。子供の名前をどうしようか、悩んでるんだけど。

アンタには曾じいさんから受け継いだ立派な名前があるだろう。

確かに曾じいさんはフランスで有名な怪盗だった。でも、伯父が俺の名前を汚して、今ではイニシャルしか名乗れなくなっている。

アルセーヌ・ポルゴはどうかな？ 昔の俺のリングネーム，ポルゴをやるよ。これから、あんたの子孫は代々ポルゴという名前を名乗っていけば、いい。

ありがとう。セキカワさん。でも、息子じゃなくて、娘が生まれた場合は？

そうだな。俺の昔の彼女の名前を取って、ノリコはどうだ？

結局、キラー・L の子供は男の子だった。その後、代々、アルセーヌ家に長男が生まれた場合は、ポルゴと命名する決まりが生まれた。

これが銀髪碧眼のアルセーヌ・ポルゴが生まれたエピソードだ。キラー・L の直系の子孫は、彼が恋人にプレゼントした金のネックレスを受け継いでいる。

デスマッチの帝王、グレート・セキカワの遠征時代のリングネーム、ポルゴが、我らがアルセーヌ・ポルゴの名前の由来である。

物語はおわらない。そして、伝説はつづく。

東郷 VS 西郷-ファースト・コンタクト-

師匠が試合とはいえ、殺められた。

その知らせを聞いた東郷源一郎は表の技に加えて、裏の四十八手の研究にいそしんだ。

相手の名は、西郷詩郎。柔道と合気柔術を極めた使い手で、まだ若者だ。

西郷は模範囚として出所すると、無言で本来の相手の前にあらわれた。

東郷も無言であった。

ただ手合わせをすれば、いい。

会話はいらなかった。

金星で鍛えたはずだ。負けることは、ない。そう思う東郷。

全身のオーラを第八段階まで爆発させた。

組めば、西郷有利。

打撃では、こちらに一理ある。

そして返し業にも、一理、いや一日の長があるはずだ。

構える。勝負がはじまった。

東郷はステップインすると、左のジャブから右のコークスクリューミドルを放つ。

西郷は左手でミドルをブロックする。セオリーどおりだ。

東郷は強烈な右ローを放った。すかさず右のハイに行くと見せかけ、キャンセルして左のソバットにつないだ。ヘリコプターキックという技だ。

西郷はまだブロックで技を防いでいた。キャッチには来ない。

どちらも、まだ本気を出していない。

隠している実力の差があることは明白だ。どちらが上かは、まだわからない。

不敵だな、そう思う東郷。

東郷は誘って、わざと右のストレートをゆっくりと放った。

西郷は思わず今の右ストレートをキャッチすると、そのまま一本背負いの体勢に入った。

そのまま、右足で払腰のように強烈に右脚を刈り払う。

一本背負い崩れの山嵐だ！

東郷は不敵な笑みを浮かべた。

腰を自護体に構えると、そのまま豪快なバックドロップで山嵐を切り返した。

宙を舞い頭から落ちる西郷。

グラウンドにつなぐための技ではなく、KO を狙った一か八かの切り返しだ。

東郷はスタンドのまま、勝負継続を要求した。

山嵐、敗れたり！

さて、どうするよ。西郷さん？

西郷の至高の技を封じた以上、もうこちらは相手のグラップリングに注意しつつ、打撃で攻めるべきだ。

そして、西郷をしとめるために開発したあの技、龍虎スープレックスがある。

西郷は立ち上がるとジャブから右の足払いに移行した。

東郷は右の足払いを燕返しで躱すと、左のハイを放った。

西郷の頭上を東郷の左脚が通り過ぎた。

若いな。お互い...

しかし、まだ俺には奥の手がある。そう思念する東郷。

全身のオーラを両手と両足に込めて、強烈な打撃のコンビネーションを放つ。

ワンツーフック、右のミドル。

すかさず今の右に、西郷はカウンターの裏拳を放った。

この時を待っていた。西郷が山嵐以外の技で、背中を見せることを...

東郷は全身のオーラを集中して、間合いを詰めると、西郷の左腕をチキンウィング、右腕をハーフネルソンに捉えた。そのまま、芸術的とも言えるハイアングルなアーチを描き、西郷を頭からスープレックスで投げ放った。そのまま完全にホールドして、西郷にダメージを与える東郷。

クラッチを解いた東郷は、無言で立ち上がった。

西郷は気絶していた。

東郷は無言で、西郷の鳩尾を軽くパンチすると、意識を取り戻した西郷にこう語った。

「次はアンタが勝つかもしれないな。西郷詩郎。今日で、貸し借りはもうなしだ！」

西郷は無言で東郷を睨みつけると、東郷は無言で右腕を差し出した。

軽く手を重ねる両雄。

西郷を立ち上がらせると、東郷は、すぐに手を離して、右目で合図を送り、その場を立ち去った。

これが東郷師範と西郷詩郎の初戦であった。

最後の決勝戦！

キングオヴギャラクシーの主催者、三代目の銀河の大王は、主催者権限を利用して、アルセーヌ・ポルゴにキングオヴギャラクシーチャンピオンマッチを挑んできた。

ルールはユニバーサルール。パウンドはなし。キック・サブミション・スープレックスはなんでも有りだ。

地球の月のムーンアリーナという因縁の地で、最後の決勝戦ともいうべき試合が開催された。

特別レフリーは西郷詩郎だ。

ポルゴはパープルパンサーを意識したスタイル、紫のパンタロン、紫のオープンフィンガーで統一していた。

一方、三代目の銀河の大王はヘビー級のボディをアーマーに包んで、リングインしていた。

それは誰だって、銀河の大王クラスを目にしたら、特別なエネルギー波を使って、オーラでぶっ飛ばしたいと思うだろう。

でも、銀河の大王は、厚い皮とアーマーを着ている。ここは発勁、いや、打撃よりも、関節技で勝負に出たい。

ゴングが鳴る。

ポルゴはアップライトに構えると、ややスピードに劣る大王に、音速の低空タックルだ。

大王は重厚な体を利用して、バービーの姿勢でタックルを切る。

大王クラスにタックルは行けないか。

一旦、間合いをとって、無駄にジャブを放つポルゴ。

大王は左ストレートから、右ストレートを放つふりをして、腰まで拳を引いた。

そのまま全身のオーラを溜めて、一気に前に突き出すと解放した。

超特大のギャラクシーウェーブだ。

ポルゴはガードの姿勢で、全身のオーラを集中して、守った。

リングが光っている。

（ここで俺がギャラクシーウェーブで返したら、盛り上がるけど、勝負は負けだな。）

冷静に踏み込んで右のローから左のシャッセバーに移行するポルゴ。

大王は大ぶりの右フックで強襲する。

ポルゴもすかさずガードで対応するが、ガードの上からでも響く。

どうにかしてグラウンドに引き込む必要があるな。

それは、西郷だったら、必殺の一本背負い崩れの山嵐がある。

しかし、俺は東郷流、いや源流の流れを汲む者だ。

だとすれば、解は一つ。

紫電のオーラを纏い、右のフェッテからローを放つポルゴ。

二段蹴りだ。

すかさず左のフロンタルを放ち、間合いをとった。

大王が音速のワンツーを放って反撃した所、右ストレートをキャッチしたポルゴは、手首の関節を完全に決めて、腰を入れて、上段の当て身投げで大王からテイクダウンした。

すかさず十字に移行して腕を締め上げるポルゴ。

大王も翼を使ってもがく。

なんとか外した大王。

両者柔術立ちを使って、間合いを取りながらスタンドに移行した。

まだ大王にはとっておきがあるかもしれないな。

しかし、相手の手の内を全て受けて勝負するのがプロレスなら、相手の手の内を出させる前に決めるのが総合格闘技だ。キングオヴギャラクシーは総合の一種に分類される。

ポルゴは大王に組みつくと首相撲に行くと見せかけた。大王が誘いに乗って不用意に膝蹴りを出した瞬間、ポルゴは腰を入れて、内股を決めた。そのまま大王の左足に膝十字を決めた。

さすがの大王も、伸びきった膝を見て、ギブアップした。

こうして、ある意味、今銀河世紀最大の祭典の一つの幕が閉じた。

キングオブギャラクシーは現代の総合格闘技だ。

強い方が勝つ、それでいい。そしてわかりやすい。

ポルゴは勝ち名乗りを受けると、クリーンに握手をしてリングを去っていった。

花道を歩くポルゴには、駆け寄って行く妻子の姿があった。

さらば、グレートセキカワ！

このビデオアーカイブは、アルセーヌ・ポルゴの名付け親、グレートセキカワの引退試合の映像である。涙なしには見れない、感動の映像である。

それはプロレスラーという職業には引退がないという定説がある。プロレスが最強のプロスポーツであるように、光と影の中で、彼らはある意味引退しないのである。何度でも復帰するし、一度でも試合をすれば、ファンの心の中では永久に現役である。

我らがグレートセキカワ、つまりデスマッチの神様が引退試合をでっち上げた時、その対戦相手は誰をとっても役不足と言われた。初代グレートアジア、アキラ兄さん、レジェンドパンサーなどのビッグネームが世間で叫ばれると、世界プロレスリング協会とデスマッチ帝国の談合により、レジェンドパンサーがフリーファイトランバージャックデスマッチで勝負を受け入れて来た。

フリーファイトデスマッチ、つまりリング上にはあらゆる凶器および「武器」の持ち込みが許可されていた。またランバージャックデスマッチであり、場外ではあらゆるセコンドの介入が許されていた。

つまりこれは、レジェンドパンサーの所属する世界プロレスリング協会と、グレートセキカワの所属するデスマッチ帝国の代理全面戦争である。

ゴングまで待てない。

グレートセキカワはポルゴの先祖であるキラー・L をセコンドに 1 名だけつけていた。デスマッチにプロの殺し屋をセコンドに指名するという粋な男。一方、レジェンドパンサーは、何とアキラ兄さんとザ・フジワラというかつてのユニバーサルファイト実力ナンバーワン決定戦の優勝者と準優勝者を指名していた。

　レジェンドパンサーはマイクパフォーマンスでこう切り出した。

「セキカワ。今まで長い間ありがとう。今日がお前の命日だ。さあ、デスマッチの帝王として今日はどんな凶器でも受けて立とうではないか」

「パンサー、そして観客の皆んな。今日の俺様は武器も凶器も持参していない。強いて言えば、俺様の存在自体が、強力な最終兵器だ。悪いが今日はパンサーの命日でもある。俺様はお前を倒して、そのまま殺人犯としてムショ送りになるだろう。今日の試合が全宇宙に中継されていることは、ある意味、ショッキングな出来事でもある。俺様がデスマッチの神様としての仕事を完遂してしまう瞬間は、幾ら俺様がプロであろうとも、お茶の間に流すには、刺激が強過ぎるかもな」

「ゴチャゴチャ言わんと、誰が一番強いか決めたらいいんや。」

　ゴングが鳴る。

　圧倒的な歓声だ。

　いきなりバックステップでロープに身を持たせるセキカワ。

　レジェンドパンサーがアップライトに構えて、いつシュートスタイルで打撃を撃ち込むか様子をうかっがっている。

　問答無用のラリアットで勝負に出るセキカワ。

　今はヘビー級のレジェンドパンサーは第１打を受け止める。なおも、さらにバックステップして、第２打を打ち込むセキカワ。まるでネオジパングプロレスを創始したあのパンサーの師匠と、オールジパングプロレスの社長であったセキカワの師匠との代理戦争が始まったかのようであった。

　３度目の正直。なおもラリアットで攻めるセキカワの攻撃を、掟破りのフジワラデスロックで切り返すパンサー。なおも、パンサーは右腕を攻撃対象に絞ると、強力なチキンウィングアームロックでセキカワの右腕を絞り上げる。普通の選手であれば、これでギブアップしてもおかしくない。

が、そこはデスマッチの神様である。グレートセキカワは強烈なブリッジでパンサーを振りほどき、そのままスタンドに移行した。

「それは、あんたらユニバーサルの系統のプロレスラーはクレイジー柔道と抗争して、それなりの成果を上げて来た。しかし、あのヴォイス・クレイジーを倒したのはこの俺様だ！」

天才と呼ばれたパンサーのセンスに衝撃が走った。クレイジー柔道の技を使って、セキカワを血祭りにあげ、そのまま引退に送り込む。

パンサーが掌底の嵐でセキカワを油断させると、そのまま超低空タックルに行く。そのままマウントポジションからのパウンドの嵐だ。

一発、二発、オープンフィンガーグローブを身に付けたパンサーが容赦なく、セキカワを殴る。普通であれば、バックチョークでノックアウトである。

しかしながら、百戦錬磨のグレートセキカワの眼は死んでいなかった。パウンドの嵐を受けながら、巧みにブリッジするセキカワ。そして器用に右脚をパンサーの腹部に掛けると、そのまま柔術では反則の外掛けに転じた。そのまま容赦なくヒールホールドを極めるセキカワ。

なんとこの瞬間、あのレジェンドパンサーがギブアップした。

デスマッチの神様が、全くの武器も凶器も使用することなく、ユニバーサルファイト実力ナンバーワン選手権の優勝者に関節技で勝利した瞬間である。

そしてこの試合で名声を不動のものにしたセキカワは、約束通り、完全引退したのであった。

しかしグレートセキカワの勇姿はファンの心に完全に焼き付いてしまった。もちろん、その後セキカワの名声を見込んで、2代目グレートセキカワを襲名したい後輩レスラーは後を絶たなかったが、セキカワ存命中はファンがその存在を許さなかった。デスマッ

チの神様は、唯一無二だからだ。

さらば、グレートセキカワ。彼の勇姿はファンの心の中に永遠に焼き付いて離れない。

アルセーヌ・ポルゴ特別篇

著　　夏木康志

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社